

## 學界展望

## 東洋史學會の動向

日本帝國主義の東洋各地への、特に中國への侵略戦争は多くの人々を瘡炭の苦しみにおとし入れた。その悪しき力は吾が東洋史學界にも及ぼざる筈はなく、學生研究人の戦死、戦傷、戦災廣範なる生活の破壊、印刷出版機能の中断、沈滞等を惹起し、戦後三年いまだ十分にはその影響から脱してゐない。にも拘らず東洋史に關する多くの研究がその惡條件の中から續々發表せられた。吾々は、著書乃至雜誌に載せられた、これらの諸研究を通じて戦後東洋史學界の動向をうかがつてみたい。學界と云ふ時、それは諸研究と共に、それらの諸研究の發表機關たる各専門誌にも視点が向けられるべきであり、むしろそれらの雜誌から、きはだつ

た動向がうかがへもするのだが、こゝでは研究を通じてのみ考察する。中國人の手になるものはもとより諸外國の研究には及び得なかつた。「古代・中世」、「元・明清」時代と細別したのは、數多い研究を、一人で通讀し得なかつたと云ふ技術的事柄に基くもので、他意はない。かゝる細別をなし三名が別個に擔當した爲重複して述べられてゐる点も一、二ではなく、又同じ對象が違つた視角から捉へられもしてゐて雜然たるのせしりも免れない。しかし捉へ方の不一致そのものが、又學界の動向を示すとも云へると思ふ。著書乃至論文の下に書かれたアラビア數字は發表年月である。

## — 古代・中世 —

終戦後三年近くの間に東洋史學の古代中世部において公けにされた論著は、やはり戦時中に準備されたものが大部分であり、この苦しい体験の中に一層鍛鍊された迫力がにじみ出てゐるのは、頼もしいことである。最近ぼつぼつと新しい自強のもとに執筆されるものも出でつゝあり、科學的實證的な態度が特に強調されるのけ著しい特色であるが、單に合理的なものに最上の價值をおき、それをもつて直ちに中國古代中世の文化を計らうとするところに無理があるやうに思はれる。もちろん我々の學問的方法として、實證的な態度を寸時もずてることは出来ないが、その對象となつた中國古代の文化は、近代の論理的な構造と異つた本質をもつてをり、そこにまた大なる特色もあることを思ふべきである。この國民的な一大試練の時に當つて、われわれは東洋の古代中世より何を學びとるべきかは、

極めて重大な問題である。

終戦後この方面の著書の中、具塚茂樹氏の「中國古代史學の發展」(弘文堂刊、21・11)を第一に推すべきは、何人も異論がないであろう。最近三十年來に發達し來れる甲骨金文の學は、そのおびただしい成果をもつて徒らに紛糾錯雜し、たださへ容易に近き難いこの種の學問を一層わかり難いものにしてゐた。そして民國十七年以來中國における中央研究院歴史語言研究所を中心とした殷虛の科學的調査の結果は、傳承の古史を俄かに明るみに引きだして世界の人人を驚かし、一般注目の的となりつつある。甲骨金文の新資料による中國古代史の研究は、中國においては纒振玉、王國維氏らによつて先鞭がつけられ、董作賓、容庚、郭沫若氏ら幾多の英才がつづいて現れ、わが國においても内藤湖南、林泰輔博士らがこれに注意してこられたが、内藤博士の門に出でし具塚氏が、東方文化研究所にこの學問を專攻すること二十年、氏の組織的な頭腦を以て從横にこの問題を解

### 東洋史學界の動向

明し、本書に見るが如き最も高級な概説書をつくられたことは、まことに有難いことである。本書は序論において研究方法的の問題をとりあげ、今日わが國の學界がなほ本文批評の疑古派に固つてゐるのを遺憾なりとし、中國における新資料による釋古派の活動を紹介し、就中疑古派の立場から釋古派の方法と成果とを擧取しつつ、この兩派を綜合してゆかうとする揚寬氏の態度をもつて最上なりとしてゐる。氏のこの警告に對しては反對する向もあるやうであるが、ただ新資料を使ふだけで満足できるものではなく、氏の親切な助言には充分傾聴する價值がある。第一部「最近における中國古代史學の發展」は、宋以來おこり來れる金文解釋の歴史と、近三十年來の甲骨學の新展開と、ともに紆餘曲折をきはめたこれらの學問發達の跡をたどることによつて、おのづから古代史の究明に導くやうに書かれてある。著者はここにおいて最も批判的な態度を堅持し、先人の如何に些細な學説をも見逃さずして、而も明瞭に大き

な結末がつけられてゐる。第二部「新資料を通じて見た殷周王朝の文化」においては、著者独自の中國古代史が展開されてゆく。はじめの殷周兩民族の文化の性質に關する考古學の見解については、學界にいろいろ疑義も生じてをり、改めて著者の詳細な説明が要求される。その中殷周革命の本質についての王國維氏の說に對する批判は、最も生彩をはなつてゐる。即ち王國維が、東西二文化圏の對立交渉による中國古代世界形成の過程を説きしに對し、著者は、殷虛末期の文化は東西二文化を或程度融和し、中國中華世界の文化を創造しつつあつたこと、即ち殷末の文化はすでに東夷文化と同一でないことをのべ、又王國維が、殷の兄弟相續より周の父子相續への移行を周公の獨創なりとせしに對し、殷の晩期にはすでに父子相續制を原則とするに至つてゐたので、その頃なほ小子相續制なりし周は周公によつてこの殷の父子相續制を取り入れしものなること、又王子分封制も殷末すでに部分的に實施されてをり、封建

制度の組織も周公は殷を踏襲したのであつて、たゞ周は原則として王室の子弟を邊境諸侯に分封し、殷が異姓の有力國家に諸侯の稱號を與へたのと異なるのみである。と論じ、要するに周公の功績は、獨創性よりも老練な實行家としての手腕にあると結んでゐる。この周公の事業の政治史上における意義を明かにしたことは大きな功績である。更に著者は殷周革命の眞の意義を、むしろ文化の基調の變化であり、殷の定命思想より周の非定命思想への轉換にありとしてゐる。そして尙書の大誥篇と召誥篇とを比較し、前者に見える、殷の三監の亂を平げし時の周公はなほ實味思想に文配されてゐるが、後者の成王の即位を告げし時の周公は、徳により一定の範圍内に於いて天命を消長せしめることが出来ると思つてゐたので、殷代の絶對的定命論の重壓にうち克ち人間の道徳的自由を備かながらも確保し得たことは、中國古代精神史上における劃期的な進歩であつたと論じ、この點郭沫若氏が殷周兩民族に對し、定命論と

非定命論とを夫々使ひわけしたる周公の政治的狡智に歸せしめてゐる説を駁し、著者は年代的に推移の跡を決定したものである。著者が周公の非定命論の根據を、周民族の耐乏勤儉の民族精神に結びつけて歴史的に説いてゐることは正しいが、この周公の或る年代における思想上の變化を以て、全民族の轉換であるかの如くに説いてゐるのは、やや唐突の觀なきを得ない。かかる根本的の推移は、新舊たがひに錯綜しつづつ除々に進んでゆくものであり、やはり時代思潮として把握すべきであらう。

貝塚氏の史學に對し、平岡武夫氏は哲學の立場より、尙書を中心に、その上甲骨金文の資料をも驅使して、「**經書の成立**」(全國書房刊、21・6)を公にされた。氏によれば、經の中心たる尙書が、古くは單に「書」といはれた如く、書かれたるものは殷周の當時にありては、王者にのみ許されたものであつた。そして殷周革命にあたり周人が見出した天下的世界觀を、のちに周室が衰へし頃に、史官が追慕

して編纂したものが尙書であり、尙書に見られる周初の精神が根源となつて經書が成立したとなす。氏は龜甲文について、刻辭は設問の命辭でもなく又占斷の繇辭でもない。それは祭祀が終つて、王者が王者としての行爲を完遂したときに始めて刻しつけられるものであり、従つて「亡咎」「大吉」などの肯定的な面においてのみ記されてをり、ぐわんらい龜甲文は卜占とは獨立した「書かれたるもの」として王者の記録であるといふ。しかし右の如く解するとき、王の行爲を監視する史官の道徳的規範が第一義にあつたといふことになり、著者の主張する殷代の宗教性との矛盾する。その價值標準はあくまで宗教的な卜兆にあるといふかもしれないが、それにしても肯定面のみが刻辭として記されたるに對し、無刻の龜甲が無数に現存することは殷王の宗教的不信を示すこととなる。よつて現存する龜甲の凡ては宗教心の衰へた殷代末期のものなることを先ず證する必要が起つてくる。われわれ門外漢の自然の道理より觀

察するならば、龜甲文はやはり龜卜といふ卜占を第一義とするものであり、王者は卜兆において「吉」の場合のみを實行して、「咎」の場合は行爲しないのであるから、もし劉澗は後よりなされたとするならば、そこに肯定的のものばかりが翻されてゐるのは當然のことである。次に氏の天下的世界觀については、哲學季刊第四號にも「天下的世界觀と宗教」と題する一文あり、また東光第二號<sup>22</sup>・1にも「天下的世界觀と遠代國家」を發表してをり、この理念が本書においても中心的な位置を占めてゐる。周初の天なるものが理性的合理的なものであるといふ氏の説については、すでに反對説もあるやうであるが、殷の宗教的民族的的世界觀から俄かにかかる合理的な世界觀が出てくるのは、いまだ尙早の觀なきを得ない。歴史的現實として、それは承服し難い。孔子の思想には極めて人間的道德的な特色が見られるが、墨子は天の中に宗教性を觀じ、老莊は超越的なものとなし、その他諸氏によつて天の解釋はまちまちであ

る。獨り孔子の思想のみが周初の天の觀念から導かれたものではなく、諸子百家の思想の淵源するところもまた遠く周初の天命觀にある。殷帝には孔子の天の思想そのものがなほ漠然たる意味をもつたをり、それが源となつて、爾後の天の思想が發展してゐることを思へば、周初の思想がしかく明確なものでなかつたことは容易に推察できる。凡そ合理性といふものは餘程人智が進んだ後に起つてくるものであり、近代において完成するものである。殷の宗教がなほ天命觀に止まつてゐたとすれば、それが急に合理性に一變することはあり難い。思ふに周人が殷周革命にあたり民意の中に見出した天なるものは、もつと自然的なものであり、民といふ大衆の赴くところに自然の流れがあつて、自然の流れの中に「正しきもの」を把握し、これをこそ天と觀じたものではなからうか。それはともかく、氏の經典尙書に對する憧憬ともいふべき敬愛の念は、この晦澁な古文辭を研究味讀して文學的鑑賞にまですみ、古典に對

する興味を喚起するところが少くない。中國における王者の地位が世界いづれの國のそれよりも大なるものであり、たとへば印度が宗教的なるに對し、中國は政治的にして常に玉璽を中心にして文化が發達してゐることを思ふとき、本書が中國王權の精神的基礎を明らかにしたことは大きな功績である。また著者が本書において、訓詁の學を尊重し文字解釋の重要性を説いてゐることも注目し値する。凡そ漢字を知ること、中國文化に理解をもつ上に大切なるのみならず、わが國の文化を學びこれを將來に發展さす上にも絶対に必要である。漢字の短所を指摘することは容易であるが、短所は即ち長所であり、その長所はわれわれの文化建設にとつて、何物をもつても替へがたいものである。且つその短所も、研究がすすめば大いに是正することができる。私は漢字文化の意義を確認し、今後日本人がますますこれを研究せんことを切望するものなるが故に、氏の如きこの道の専門家の健闘を祈つてやまない。

思想史の立場からなされたものに、津田左右吉氏の著書「論語と孔子の思想」(岩波書局刊 21、12)がある。竹内崑雄博士の「論語の研究」が熱然と穩健な學識をもつて書かれてゐるのに對し、津田博士の著は思想が發展的に把握され、思想的に深いものである。津田博士の方法は一般に疑古的といはれてゐる如く、その本文批評は徹底してせず、その學究的態度には敬服に値ひするものがあるが、ぐむんら、非論理的な中國古代思想を、合理的な立場にのり、價值を置いて批判すれば、凡そ其點をけになつてしまふ。缺點を思ひきり追究してみること、そのものの眞價を知るうへに大切ではあらうが、その缺點が全體であるかのやうに思はしめるのは如何であらうか。著者は、從來孔子や論語の研究が儒家の手になされたため、眞實を觀ることができなかつたとし、儒家的な立場から離れて客觀的にみることが大切であると言つてをられるが、凡そ愛情なくして眞實をつかむことは出来ないであり、儒家の

人々が孔子や論語に對して深い敬愛の念をもつてした態度も、一途にすて去ることとは出来ないのである。氏に従へば、中國人は物が何であるかを究めるのでなく、何をすべきかを知らうとするもので、眞實を知らうとする學問的精神に缺けてゐる、それは孔子自身においても見られる缺點であり、この精神が起らなかつた一つの理由は、自然界の理法に眼を向けず、人事問題にばかり心を用ひたからであり、爲に折角孔子に渾を發した人間的な道徳も次第に抽象的となり、結局漢儒の利祿を求め吉凶禍福を問題とする呪術的な學問となつたのである。又中國人が魂を神に結びつけ、その魂の上に道徳を建設することをしなかつたのもかくなる原因で、孔子が道徳を人間性の上に立てて超越的な神を説かなかつたことは現代人の氣持に適ふところであるが、却つてそれが古代においては道徳の健全な發達を阻害することになつたのであるとしてゐる。しかし著者のいふ「人間以上の無限の力をもつ神の恩恵に依頼する」

やうな宗教は中國に發達しなかつたけれども、この眞實を絕對なるものとし、その中に否定即肯定による救済の原理を求め、意味の宗教は、中國にも發達した。偉大なるシナ儒教はこの原理の上に立つものであり、その一方の原流をなす老莊思想もまたこの傾向に立つものである。儒家は儒家として人間の徳を通して眞實をつかむ方法を發見し漢代にそれが迷信的になつたとしても、やがてその頃から中國精神史は老莊に移り、更に佛教受容へとすすんで行つたのである。漢儒の呪術的一面をもつて、直ちに中國人の學問的精神や宗教を卜するわけには妙かないであらう。著者はまた、中國においては凡てが君主ないしは官府が中心で、人民の利益が考へられてゐないことを痛論してゐるが、社會の發達しない古代にそれを求めることは無理であり、近世は近世として別の觀點から論ぜらるべきで、これも短所のみを指摘したものにすぎない。同じく思想史の立場より書かれたものに、板野長八氏の「荀子の思想」特に天

人の分について——(史學雜誌五六の八) および「荀子の禮説」儒教成立の前提として——(歴史學研究第一二八號227)がある。板野氏が六朝思想史より出て、最近は古代にまた近代に、その精緻な論陣を張られ、ことに先秦諸子の思想を次々に體系づけられてゆくは、津田博士の勲を摩するものがある。氏によれば、荀子の人為的世界は依然として傳統的な天命の下にあり、ただ聖人は天と並んで、それと相參じ相輔ける意味において禮的人爲的世界を確立し、萬物萬民はこの聖人の絶對的專制の下に立つことになつた。従つて荀子の天を自然科學の對象としての自然と見ることも出来ないし、また彼の思想から個人主義や自由主義を引き出すこともできない。予なほ荀子においても、孟子と同様、天と人との間に一定の間隔をもち、天命といふことを考へ、時により遇不遇のあることを認めてゐるものとなす。この天と人為との關係については、更に考ふべき點があると思ふ。氏のいふ「一定の間隔」とは如

何なる意味であるか。氏は「遇」を天命とし、「不遇」を天命に遇はぬことと解してゐられる様であるが、殷代の定命論と異なり、戰國時代にはもつと高次の天命觀があつた筈である。遇をも不遇をも命なりとするところに天命の意義があるので、孔子においても遇よりはむしろ不遇を命といつてゐる方が多い。荀子が天を制して而も天に順ふことを説けることの矛盾についても、必然と自由との關係が荀子には相當深く考へられてゐる。板野氏がそれを、老子の無爲而無不爲をもつて説明してゐるのはよいが、無不爲を專制主義的に解してゐる氏の老子觀によつては、充分に説けないのではないかと思ふ。なほ「荀子の思想の如き不徹底な人間開放の思想さへも異論とされた傳統支那に於ては、宋だ人間が発見されてゐなかつたのであらう」といふ氏の結論についても、天命思想が残つてゐる爲に不徹底な人間開放に終つたといふ意味であるらしいが、天命とは要するに必然といふ意味であつて、むやみにこれを迷信あ

つかひにするのは考へものである。再び貝塚氏のもので、その近著「古代の精神」(秋田屋刊)を紹介しようと思ふ。日頃甲骨金文の學に没頭してゐる著者が、この書においてはななるべく漢學の型から脱け出るやうに、固くるしい實證にしばらく只やうに書いたといふことで、確かにその点では成功して人物描寫などはキビキビしてめて氣持がいいが、ただ文章がやはり固苦しいのは惜しいことである。「政治史としても、文化史としても徹底し得ない感はあるが、そこに自分の行き方があるとひそかに信じてゐる」とあるがこれは短所のやうに見えるが、實は大きな長所である。ぐわんらしい政治史と文化史とを綜合することは至難の業である。中國においては殊に兩者の關係が密接であるのに拘はらず、一般にはなほそれが行はれてゐないところに、東洋史學の恨みがある。ひとり内藤湖南博士をがそれ成しとげられた。私は本書において内藤先生のよき傳統を見るものである。本書のうち「孔子と子産」におい

て、孔子の思想の先蹤をなす賢相時代の文化史的意義が明らかになされたことは特筆すべきである。また「孔子について」では、顔回の消極性をしりぞけ、孔門の個性ある發展の爲に、むしろ顔回の早逝したことを喜ぶと結んであるあたり、如何にも面白い見方ではあると思ふが、しかし顔回の愚直もまた孔子の大切な一面であり、たとへ顔回が長生したとしてもその爲に孔門弟子の發展がさまたげられることはなかつたであらう。のみならず後世の儒者が多く利祿の學問に走つたことを思ふとき、なほ二人三人の顔回があつて然るべきではなかつたであらうか。

ここで湖南博士の遺著「中國中古の文化」(弘文堂刊 22.4)の出版を祝したい。未刊の先生の遺稿が、終戦後相ついで公けにされることは獨り東洋史學徒の喜びたるに止らず、一船讀書人にとりて大なる恩恵である。いやしくも中國の歴史、文化を學ばんと欲するものは、須らく先生の著書より入るを最上とするものと私は信ずる。本書を讀んで特に記憶にのこ

る二三の點を上げて見ると、先ず中國文化の根本について、中世貴族時代の經學、文學、藝術などが本になり、今日の中國文化もその上に築かれてゐることを強調されてゐるのは、平凡なことのやうで甚だ大切であると思ふ。また後漢時代における貧富の懸隔より來る弊害として、道德的に儉約を強ひられてゐる官吏が、責任なき者の極端な奢侈に對し體面を保つのに苦しみ、それが道德的文化の崩壞する原因となりしことを、仲長統の昌言に據つて指摘し、或は中國の政治の文化性を、模倣政治より來る鑑賞と餘裕に歸して説かれるなど、非常に含蓄の深いものがある。

「支那學」が終戦後「東光」と改名され、編輯方針をかへて近代的な感覺の下に、中國文化の解明に進みつつあるは注目すべきであるが、その第一號(22.8)にのせられた森鹿三氏の「竹と中國の古代文化」は、久しぶりに氏の博識にふれて啓發されることが多い。今日中國の北緯三十四度以北には生育しないといはれ

る竹が、古代にありては自給自足されて古文化と密接な關係をもつてゐなことを、歴史地理學の上から證明し、春秋末頃から竹を産出しない華北平原を基本地帯とするに至つて、新しい環境に適應した生活様式を創成しなければならなかつたとし、殷より漢に至る古代をそれによつて二分して前後二期の特性を概観するなど、特殊な見方が示されてゐる。

東洋史研究第九卷五・六合刊號(22.8)にのせられた田村實造博士の「漢代における廣寧僑印地方の開發」は、南洋華僑發展の現狀より筆を起し、中國と南洋諸國との交通が漢代において充分その基礎がきづかれ、番禺(廣東市)を中心として政治經濟上の進出が如何になされたかを説いてゐる。特に後漢時代の南海諸郡が、表面叛亂などにより政治力が弱つた如くに思はれて、實はその戸口が唐代よりも遙かに多くなつてゐる事實を、唐代までの戸口數の精密な比較によつて示してゐる。簡單であるが、氏獨特の堅固精緻な考へ方は學ぶべきである。

同じく漢代のものとして宮川尚志氏の「漢代の家畜」(東洋史研究第九卷五・六合刊號22) および第十卷一號22(12)は、「上代中國の遺産」(學海第三卷第六號)とともに、社會經濟史の分野を開拓するものとして、將來の成果が期待される。

宮崎市定博士の「科擧」(秋田屋刊21・10)は、中國の學問文化と關係深き科擧制度を體系的に究明敘述したもので、博士の廣範な學問にして始めて成し得る所であり、これによつて學界に與へられる便宜は少くないものがある。本書は科擧の完成した宋以後に重點がおかれてゐるのであるが、初め科擧の沿革を論じた部分には、その淵源をなす漢代の選舉より説きおこし、人物本意の他薦制の中にある一つの弱點が六朝の九品中正を生み出したこと、それは選舉權を地方豪族群へ委譲したことになつて六朝貴族制度確立の一大契機をなしたことを述べ、次に北朝の貴族制が中央政權の干渉下にあつた爲、次第に官僚的となり、かくて鞏固な中央

集權が先づ北支に現れて隋唐二王朝となりしこと、さらに宋の君主獨裁制が唐宋五代の間に準備されつゝありし事を科擧の上より論ずるなど、非常に重大な問題が含まれてゐる。また漢代の他薦本位の推擧より後世の自薦本位の科擧に移るいきさつを、今日の内中と試験制度に引當ててのべ、唐の帖經や五代の墨義などに見られる幼稚な舊教育にあきたらずして、新しい形式と方法とにより經書の教育を發明せんとして宋代の新學が起りしことを論じてあるのも意義深いことである。博士が史林三一の一にのせられた「清談」も、歷代士風と官吏登用法といふ觀點から考察されてゐる。もと選舉の混淆に對し民間志士の間より起りし清談と同じ意味であつた清談が、清談の頹廢によりそれから分離して、竹林七賢らの虛無主義を通過し、西晋に至りて談論の爲の談論といふ社交的意味に變り、酒を伴ひ風彩をかざり、階級的な門閥の特權を主張して選舉とも密に關係し、かくて清談は貴族的排他的な封鎖社會の交際要

具と化してたとのべてある。しかしこれは清談の缺點のみを強調した傾きがあり、もつと廣く文化史的な立場をも考慮に入れて論んずべきではなからうか。

同じく宮崎博士の「アジャヤ史概説正編」(人文書林刊22・12)は、ベルシヤ、印度、アジャヤ全般にわたる、舊石器時代以來の廣範な歴史を、教科書風に概説したもの、その資料は他の多くの人々の手に成るものであるだけに、内容に個性的な香ひは感じ難いが、これを博士独自の歴史觀をもつてまとめ上げ、特にベルシヤ、イスラム地方の歴史を重視して大きなアジャヤ史の體系をつくりしことは、東洋文化に對し歴史的根據を與へたものと見て、そのもつ意義は大きい。

從來の滿蒙史論叢が、新たに「東方史論叢」として發刊されることになつた。その第一卷(22・7)は原稿の都合で依然北方史に傾いたが、第二卷からは廣く窓を文化史方面にも開き、文章も平易にし、眞に東方史の名にふさはしく内容を一新して出すといふ。第一卷の中世に關係あ



るものとして、岡崎精郎氏の「唐代に於ける鹽項の發展」がある。宋朝と關係深き西夏が、すでに唐代において、唐と吐谷渾・吐蕃などの間にはさまれて、次第にその勢力を西北邊に扶植しつゝ獨立の地盤を固めゆく事情がのべられてある。後に詳細な補注を附し、精巧な論文である。

最近特に東洋史學において、時代區分の問題がさかんに論議されつゝあるは、流石に時世の大きな轉換を思はしめるものであるが、東光第二號22頁に發表せられた宇都宮詩吉氏の「東洋中世史の領域」は、この意味において、新しい問題を提起するものである。氏は人格に對する言葉として、時間的連續の外にそれ自身完結したる個性的時代といふ意味で時代格といふものを設け、例へば秦漢は古代文化發展の總歸結であるが、それ自身完結した政治性といふ時代格を持ち、それに對して六朝は自律性といふ時代格をもつてゐる。而して隋唐は、秦漢の政治的なるものと六朝の自律的なるものと

發展の融合の時代であり、從つて東洋中世史が全的に認められるためには、論理的要件として秦漢時代が要求され、よつて秦漢に始りて隋唐に終るものを中世となす。同様に近代史が認められるためには、中世の總歸結としての隋唐時代が要求されることになるといふ。氏の論説は内藤湖南博士の時代區分(支那上古史參照)を批判することより始められてゐるのであるが、博士の第一及び第二過渡期の無意義なることを指摘し、引いては歴史における過渡期の概念を否定せんとするものである。しかし過渡期を否定するとすれば、氏のいふ各時代格のつながりを如何に解すべきであるか。秦漢の政治性といふ時代格が終るとともに、直ちに六朝の自律性といふ時代格が始るのであるか。また隋唐はその兩者の統一であるとしても、俄かにそれが行はれるのであるか。思ふに歴史の現實といふものは、思索による論理の如くあざやかに轉換するものではなく、順流逆流たがひに交錯して、多くの矛盾をはらみつゝ、

數十年ないしは數百年を經過して次第にうつりゆくものである。

その間におのづから時代の個性といふものも現れてくるが、あらゆる現實が發展過程にある中に、一定の時代を區切つてその時代の個性といふものを考へる以上、當然その前後の時代の個性との間には過渡期的現象が存すべきである。内藤先生は中國の歴史を一人格の發展として見られたが、宇都宮氏は「東光」卷末の評者も指摘してゐる如く、古代・中世・近世を祖父・父・己の三人格にあてはめてゐるやうである。しかし氏が初めにのべられし如く、東洋史を「廣い意味における中國文化發展の歴史」として考へ、時代とともに原初の文化が擴大深化し、その地域も中心的舞臺が變化することなく、民族も中央において常に漢民族が混融し増大し成長してきたものである以上、それはむしろ一人格の發展と見るのが適切であり、これを三人格と見るのは却つて西洋史においてこそある程度の適應性をもつといふべきではなからうか。ともか

く本論においてはじめ、内藤史學に對する批判が試みられしことは、非常に意義深きものがあり、且つ氏が時代格を論ずるにあたり、各時代の性格を極めて明確にのべられしは、得るところ少なくないものがある。

美術史家としての小林太市郎氏が、終戦後その遺著をかたむけて續々大著を公刊されることは、學界の一偉勳である。「禪月大師の生涯とその藝術」は、唐宋亂離の世に佛者として詩人として、また羅漢畫の大家として、波瀾に富む一生を終つた禪月大師貫休の生涯を明らかにし、それによつて彼の詩と繪畫に見られる特殊の藝術をのべたもので、當時の精神史上の動きや、歴史地理的な描寫なども非常によく出来てゐる。次に「中國繪畫史論攷」にをさめられた「水墨畫の原始」は、この書にはじめて發表されたもので、戦學と漢學を中心に、水墨畫の興り來る過程が肉面的に考察されてゐる。ただ不審に思はれる點は、さきの禪月大師にしても此の水墨畫にしても、その中

### 東洋史學界の動向

に著者が夢幻的な傾向を見つけ出し、それを歐州近時の超現實主義に結びつけて説いてゐることである。禪月大師の「夢」と歐州超現實主義の「夢」との間には、根本的な相違があるべきで、中國のものは中國の立場に立つて考へるといふことが、要請されるのである。

「中國史學入門」は、京都における東洋學術協會主催のもとに、終戦後まもない昭和二十一年の秋、教養としての東洋史といふ意味で連續講演されたものを刊行したので、當時これだけの専門家を一堂に集めて語をきくことは、甚だ珍しいことであつた。それだけに講演者の氣概もこもり、東洋史學の新しい出發に大いなる力をそへるものである。入門書とはいふものゝ、内容は相當に程度の高いものであり、諸學説を批評紹介し、時代の概説と史料の解題をかゝげ、一般知識人ととりてもよき教養書となるであらう。上編には宮崎市定氏の總論につゞき、具塚・大島・宮川・塚本・外山・藤枝の諸氏が古代より鎌倉までを擔當し、元以下は下編

としてつゞいて出版される予定である。青木正兒博士還曆記念として出た「中華六十名家言行録」は、六十人の人々がそれぞれ一人宛の名家について述べたものである。現下の出版難にかんがみ、各人に與へられた紙数が極度に制限された爲か、大抵は尻切とんぼか或は人名辭典風のものになつて、一向に面白くないものであるが、中に數篇氣のきいた名文がまじつてゐるのは、流石に支那學の淵藪だけあつてこの書の價値を失はしめない。

大同石佛の研究については、早く關野、常盤兩博士の「支那佛敎史蹟」があり、最近京都の東方文化研究所古學研究室を中心とする實地調査が目ざましい成果をあげつゝありしは周知のこと、幾多の報告書のうち、水野第一氏の「雲岡石佛群」につゞいて、終戦後長廣敏雄氏の「大同石佛藝術論」が出た。それは困難な石窟内の研究であり、目下佛敎藝術に専心する著者の力ある報告書として、貴重な千數葉の圖版とともに、専門

外の人々にも親しめる書である。飛鳥・天平藝術の起原を考へる上においても、大切な基礎となることを疑はない。

もはや予定の紙数をはるかに超過して、なほ紹介すべき幾多の論文著書をひかへつゝ、一應この杜撰な筆をおくことにする。殊に考古學方面は、何れその教室より執筆されることに依頼して、こゝには省くことにした。

(昭和三年、四三)

村上嘉實

## 宋・遼・金時代

(一)

宋代と云えば、嘗てわが東洋史學界の最も活潑な研究の對象であつたのであり、又それだけに重要な問題が提起された時代でもあつた。加藤繁博士の唐宋兩時代にわたる廣汎な社會經濟史的研究と、内藤湖南博士の中國史の時代區分、特に宋代よりを中國近世とする所説とはその偉大な業績としてわれわれの前に残されている。しかし概括的に云えば、こゝ

いつたすぐれて時代的な豊かな研究の遺産が、現在正しく批判され充分に攝取されているとは云えないであらう。こゝいつた中にもわれわれは終戦後の宋代研究における停滞的な状態を痛感しなければならぬのであるが、歴史家の歴史研究がまた歴史の、時代的であるならば、現代は更にまたすぐれて歴史的な研究が要請されていることをまず指摘して置き度いと思ふ。

さて終戦後發表された宋代に關する論説・著作は決して多くはないのであるが、その中でも最大の問題を含むものは、内藤湖南博士の遺稿「中國近世史」(弘文堂刊<sup>22</sup>, 4)であらう。これは先に出た「上古史」(弘文堂刊<sup>19</sup>, 5)及び「中國中古の文化」(弘文堂刊<sup>22</sup>, 4)と共に大谷博士の中國文化史觀の体系を成すものであるが、本書に博士は、宋代を以て中國近世史の始まりとする所論を展開して居られる。博士の所説は從來とも夫々の観点から批判されて來たのであるが、その「近世」を形成する内容の最

大の指標は、貴族の没落、貴族政治の崩壊に伴つて「代興」する君主獨裁政治、士大夫階級の成立であることは周知の通りである。

ところで博士によれば、中國の貴族政治と云えば、「上古の宗教的な氏族政治とは全く別物で、武人を中心とした封建政治とも別種のものである。この時代(六朝から唐の中頃まで)の貴族は、制度として天子から領土、人民を與へられたといふのではなく、その家柄が自然に地方の名望家として永續した關係から生じたもので、勿論これは元來幾代も官吏を出したのに基因する。當時社會上の實權は貴族が握つてゐた」のであらず、「政治は貴族の専有ともいふべきものであつたのであつて、かような貴族はその發益と同様に(「宋」太宗の政策から)ではなく」唐代の藩鎮の擡頭と相俟つて、「自然に」没落して行つたものである。

しかし貴族は幾代も永續した所謂「地方の名望家」であり、従つて地方の農村共同體の有力な成員であつたのであり、

一方またそういうた制約から自由な存在ではなかつたという事は特に注意されなければならぬであらう。それは、此の中國の農村共同体の中で相互に結ばれた現實的諸關係こそ、あらゆる前代的遺制の存在にも拘らず貴族の政治的支配の最大の支柱であつたのであり、その盛衰は基本的にはそのような農村共同体の社會的内部構造によつて獨断的に決定せられたものであつて、貴族がそういうた中で最早將來に何ら前進的役割を待た得なくなつたところに、五代の過渡的な亂離の時代があつたのであり、また貴族の没落の仕方それ自体のうちに續いて興る支配的階級の性格を決定して行つた事こそ、「近世」の由來を規定する上に何よりも先づ取り上げられねばならぬ問題ではないかと思われる。もとより博士は、「近世を明かにするには、此の過渡期から入る必要」を認めて居られるのであるが、それにも拘らず「貴族—軍閥—士大夫」という一系列の支配的階級の交替が、殆どその有機的連關の下に捉えられてい

ない事は博士の「近世」史觀を考へる上で注意すべき事ではないかと思われる。勿論、博士の見解は、唐宋兩時代—中國の所謂「中古」と「近世」—を比較する場合極めて重要ならざるはない。しかし貴族—士大夫—貴族政治—君主獨裁政治—自由な土地所有者—貨幣經濟—貨幣經濟等々の巨大な社會的經濟的諸變革が何等内部的連關において捉えられる事なく、すべて自然の成り行き以上には理解されていぬ所に問題がある。わたしは此の點に博士の歴史を解く鍵が與えられていふように思う。即ち博士は「どこまでも士大夫的な立場」（宮崎教授「中國近世史」書評「東洋史研究」第十卷第二號参照）から歴史を見て居られるのであつて、それゆゑに支配的階級としての貴族、士大夫と、被支配階級としての農民、奴隸、奴隸的小作人との關係など始めから問題とならなかつたのであつて、況して貴族の没落が、社會的經濟的諸關係の矛盾、變化—それが革命的なものである

にしる、又單なる變革にすぎなかつたにしろ—に深く基くものであるなどは以ての外の事柄であつて、強力なる軍閥の擡頭—從つてそれがどのようにして興つて來たのかを考へる事なく—によつて没落して行つた以上の出來事ではないのである。この事は又「此の書に社會經濟史の問題が殆ど取り上げられてゐない」という事と照應している。從つて博士が農民の土地からの自由、人民の勞働の自由をうたつて居られても、それはたかだか農民が自己の零細な耕作地を兼併せられる自由であり、又それは農業に於ける農民の經營の發達を意味するものでもなく、事實は相對的な農村過剩人口が舊支配階級の爲めに行つて諸勞役に使われる自由に過ぎないのであつて、此處にあつたは博士の所謂「近世」を理解する緒があるように思う。

こういつた博士の「近世」史觀は、「東光」（第二號22、11）の「東洋中世史の領域」に於て、宇都宮清吉氏によつて承け續がれ敷衍されている。更らに前田直典

氏は「東アジアに於ける古代の終末」

〔歴史第一卷第四號33、4〕に内藤博士及び宇都宮氏の見解を批判して、隋・唐を以て中國古代―封建制時代の終末として、宋時代を實質的な封建制の時代として理解して居られる。嘗つて文化史的に把握された時代の轉換期としての宋代が、その所論の概論風なのは兎も角として、社會經濟的観点から封建制から封建制への轉換期として提えられている事は注目すべきであらう。

ところで先に内藤博士には社會經濟史的な問題が殆ど取り上げられていない事を指摘したのであるが、此の方面の裏附けが當時市定教授によつて爲されつゝある。最近教授は「五代史上の富饒資本家―特に晉陽李氏の場合―」（『人文科學』第二卷第四號33、4）に於て、過渡期としての五代の軍閥について考察をすゝめて居られる。即ち五代の軍閥は、社會の上層部にあつて中世的な貴族勢力が没落して近世的な士大夫階級が成立する中間の過渡的存在であつて、その社會經濟的

基礎は軍閥の有した巨大な社會的富力―軍閥資本である事を晉陽李氏の場合を例證として居られる。要するに軍閥資本の蓄積過程は、領内人民の搾取、賄賂、商業資本的機能によるものであり、従つてそれは軍閥の重農政策と商業資本化という二面性を結果した。この事は商業資本化の事態を示すように、當時の基本的な生産諸關係、即ち農村社會から軍閥が浮き上つて了つて單なる寄生的存在と化して行く事になり、一方では農村社會の内部に進行する土地所有關係の變化（部曲莊園制―大土地領有者―部曲という關係から、佃戶制度―土地私有者―自由な小作人へ）を通じて、士大夫地主―官僚地主―官僚資本を成立せしめる結果となつて、軍閥資本家の政治的支配の土台を掘りくずし、他方軍閥は益々投機的な商業資本の運轉に頼らざるを得なくなり、遂に軍隊は軍閥資本家から分離し漸次中央―士大夫的地主の上に立つ政權―に集中される傾向を決定的として、宋代の完全な君主獨裁の中央集權的權力が成立す

るに至る事が論ぜられている。此處に於て自然の成り行きとされた支那階級の交替が基礎づけられ、五代の軍閥―軍閥資本家の過渡的意義が確認せられているのである。更に教授が、五代軍閥資本の蓄積が、當時のアジア循環商業交通路に於ける山西地方の特殊的地位に緊密に繋がるものである事を指摘して居られるのは「アジア史」的観点から中國史が見られているのであり、そしてこういつた關聯の中に、中國の時代的轉換が、深くその内部構造の變化に基くものである事が洞察されているのである。更にこゝでは、續いて出現する廣大な宋の統一の版圖を考へる時、北支那のかような諸情勢の變化が、當時基本的經濟地帯として次第にその重要性を増大し、あつた江南地方の諸事情と、どのような關係を保ちつゝ統一を形成して行つたのであるかが、一層基本的な問題として提起せられていたのである。なお「アジア循環交通路」については、教授の近著「アジア史概論」正編（人文叢刊22、12）に

於て精わしく参照され度い。

宮崎教授はまた「宋學の論理」(「東光」第三號23、1)に於て、宋學の理氣論を大膽に把握し、かつ宋代の儒教の再編成は當時佛教特に禪宗の強い影響下に置かれたそれが、自己を補強して佛教に對する優位を保持しようとしたものであり、それと共に最早當時の社會に適合しなく成つた儒教古禮の再編成補強の表現として、「朱子家禮」が現われた事が論ぜられてゐる。しかししたしかに「社會狀勢の變化と共に既に實用に適しなくなつた」儒學の再編成の必然性と共に、それが當時の社會のどのような構造の變化に基くものであるか、更にそれが如何なる階層のイデオロギイとして現われたものであるかに言及されてゐないのは、他方に於て儒教が再編成を余儀なくされる程に優勢となつた佛教の存在が何に基因するのであるかといふ事と共に検討し、追究すべき問題として提起せられてゐるというべきである。此の点重澤俊郎氏は「潮流」(昭和二十三年十二月號)の「東洋と

東洋史學界の動向

西洋」の座談で、宋學の成立と宋代の商業資本の活潑化とは照應するものであり、此の兩者を切り離して考へるのは間違ひであると主張して居られるのは、此の問題に對する一つの暗示である。なお宮崎教授には、官吏登用制度を研究したものと「習藝」(秋田屋刊21、10)があり、主として明・清のそれを取扱つたものであるが、宋代の科擧制にも言及せられてゐる。

内藤博士に關しては、更に青山秀夫氏の「ウエーバーのシナ社會體序説」マツクス・ウエーバーと内藤瀾南先生」(「東光」第四號22、4)がある。氏は内藤博士のシナ社會體がウエーバーのそれと「單に結論に於て丈でなく、その考へや論理の進め方などの細い点に於てさえも」よく似てゐる事を指摘して居られるが、本稿はその前半のみであつて、その具体的記述は未だ發表せられてゐない。何れにしても内藤博士がこういつた社會學的方面からも再検討せられつゝあるのは、文化史家として丈ではなく、文化社會學者と

しての博士の偉大な半面をも再認識せしめるものであり、今後大きな課題を提起してゐるというべきである。

宋代に關する研究動向の展望が、云わば内藤博士の中國史觀を中心としての展望になつてしまつたが、實際のところ終戦後の宋代研究はこういつた人々によつてたゆみなく續けられてゐるのであつて、此の他に佐伯富氏の「宋宮の盛衰」(「人文科學」第二卷第四號23、7)及び今堀誠二氏の「宋錢幣年倉の研究」(「史學雜誌」五六編21、10)があり、論著として森克己氏の「日宋貿易の研究」(國立書院刊23、5)等がある。

これらに對して注目されるのは、野原四郎氏の「内藤瀾南『支那論』批判」(「中國評論」昭和三年、11、12月合刊號)である。氏は宋代の人民の財産所有權とは「アジア的な專制國家が、自ら商業・高利貸資本を管んで、私的な封建的土地所有の増大を阻止し、かくてこの國家の基礎たる農民經濟を維持する試み」であり、又宋代には「國家的規模に集中され

九一

た封建的土地所有とそれに對抗する私的な封建的土地所有とがあるばかりで、働く農民の自由な土地所有など全く存在する余地がなく、更に科擧制にしても「アジア的専制主義の發展とその背景たる官僚機構の整備に他ならぬ」ものとして根本的に内藤博士と對立的見解を表明して居られるのであつて、これは直ちに中國史の「近世」の問題とも關聯する。それは氏の「東洋史の新しい立場」(「中國評論」昭和二十一年六月號)と共に中國研究に新しい方向を志向しているものであり、そのグループが中國民主革命史をその集中的研究課題とする中國社會の科學的研究に著しい成果を挙げつゝある事は注意すべき戰後の動向であらねばならない。そしてそれが管ての横暴な絕對主義的帝國主義の壓制下に抑がめられた人間性と、又單なる勤のよさでは補いきれない批判的精神のひずみに對する反省の中から生れたものであるだけに、學界のみならず、ひろく人民の間に強い關心を喚起しつゝある。

こう云つた一連の批判と主張とは勿論われわれが現在置かれてゐる現實と深くつながれてゐるものである事はいうまでもない。特に中國共產黨がその近代化への實踐過程に於いて、殘存する氏族的家族的、體制の奥底にぶつゝかるものは他でもない封建的諸關係であり、それゆゑに中共は種々の曲折があつたにも拘らず反封建の一貫した闘争のうちに若々近代化への路を邁進しつゝある事實は、當然われわれをして從來のわが中國史研究に對する深い反省を喚び起すだけの力を持つてゐる。この事は、終戦後、中國史のみならずひろく歴史學一般に大きく提起せられてゐる所謂封建性の問題とも關聯してゐる。しかしかういつたわが國の現實の切實な要諦が、所謂封建性という公式のうちに歴史の豊かさを埋没させ、抽象化して了うという歪曲を持つてゐるのは又否定出来ない傾向であらう。中國史に於いて、その中に封建的諸關係を見出す事によつて、現實的にそれと離れ難く結びついてゐる前代的諸關係の虚構を

見失うならば、それは生きた中國史を死物化し、公式化するものであり、中國の人民達の生きて來た眞實な姿を形骸化することになるのであつて、ひいて中國の現實に對する救い難い誤謬を結果する事となるであらう。いづれにしても、宋代の研究に關しても從來の諸研究を再檢討し、宋代の上部構造の近代的な諸現象が基本的な、一体どのような下部構造に照應するものであるか、又宋代の經濟的社會構造がどのような基本的諸關係をその内容とするものであるかを徹底的に科學的に批判し、追求すべき時期が來てゐるように思われる。

## (二)

次に遼・金時代の研究について見度いと思うが、遼・金といへば直ちに北方史學が想起せられる。此の十余年間のわが國に於ける北方史研究は、まことに眼覺ましいものがあつたのであるが、その集中的表現の一つとして「滿蒙史論叢」全四冊があるが、終戦後は殘念乍ら決して活潑な研究が爲されてゐるとはいへな

い。こういった傾向は勿論時世の然らしめるところとして致し方ないところでもあろうが、さればといつて今迄に達したその高い研究のレベルが最早それ以上につけ加えるべき何物もないという事では毛頭ない。むしろ現在は、どうしてそのレベルを維持してゆくか、問題であるのではなくて、従来の研究が、特に戦後致し方もない低調に陥つてしまつたそれらの諸研究が、どのような立場によつて、どのようにして爲されたものであつたか、反省され批判されるべきであらう。そこから出發して所謂北方史の再検討が行われる事を最も重要な課題ではないかと思われる。

勿論、こう云つた反省が全然爲されていらないという譯ではない。藤枝虎氏の「征服王朝」(秋田屋刊2、3)に於て、われわれは此の良き意圖を見出しうるのであるが、しかしその良き意圖が今後如何に實現されてゆくかは、同氏による今後の業績に俟たねばならない。

此の方面にはもう一つ田村實造教授の

「歴史交通資料註釋」(「東方史論叢」第一北方史專號發徳社刊23、5)がある。

これは藤枝氏の紹介にもあるように(「東洋史研究」第十卷第三號26、7)新學の最高の知識によつて註釋せられたものであつて、後述に對する有難い賜物であるに違いないが、此の分野のベテランである教授が、そういった學問的レベルの上に立つて更に新しい方向を開拓してゆかれる事こそ期待せられることであらう。又教授は「東方史」を提唱して居られる。「學園新聞」第八八號)これは従來のような東洋史における莫然とした南北國史觀に對して、北方の歴史社會を主張し、これと中國中原の歴史社會とを統一するものとしての東方史を考へて居られるのであるが、教授もよく云われているように、歴史は人の頭の中で考察されるユーロピアではなく、飽く迄も現實がどうであつたか、問題であり、北方の歴史社會というものと中國の歴史社會というものとも、そういった現實的な關聯の中に促えられねばならないであらう。これと共

に矢張り戦争・征服は政治の延長であり、政治は經濟的基礎構造につながるものである事が、最も強く想起されねばならないであらう。

なお此の方面について詳しくは前記藤枝氏の「征服王朝」に遼・金・元史研究の展望が爲されているから参照され度い。

未だ云い足りない点も少なからずあり、遼・金の研究については特にそうであり、又關係論文の見落しもあるうかと思われるが、以上でわたしの宋・遼・金の研究動向の展望を終え度いと思ふ。

(一八四八、九、三〇)

(追記) なお稿了後、青山秀夫氏の「ウエーバのシナ社會體序論」マツタス・ウエーバーと内藤湖南先生(完)、「東光」第六號26、10、及び田村實造教授の「東方史の構造とその展開」(「史林」第三十二卷第一號)が發表され、又宮崎市定教授の論著「アジア史綱論」續編(人文書林刊23、11)が出ている。

(池田 誠)



## 明清時代

(一)

はじめに書いた様に、今度の戦争は研究人の生活全面に亘つて深刻な影響を與へたが、若き日の加藤繁博士が、一語の眞意を探るために數年を費したと云ふ様な(中國經濟史の開拓)中國史資料の難解さは一向に變らぬ。一語についてすら然り、多數の刊本から正しい原形を判別したり、一事項に關する多くの原典から、正しい事項を分別したりす。基礎作業のむづかしさは、毫も消滅しなかつた。そして此の種の基礎研究が成しとげられなくては、正しい中國史が記擧せられないのであるから、戦後學界の基本的な動向として考證風な傾向が、此の期のあらゆる研究を貫いてある事は當然の勢であり、又そうあらねばならないのである。清朝官府の故實について正統の史書に見られない史實に富む「嘯亭雜錄」の七種の刊本を取り上げ、「結局それらは十卷本たる八思堂本と十三卷本たる申

報館本、圖書公司本との二系統に歸する事に種々の考證をなしたる後、十三卷本を原形に近い善本たる事を明らかにし、神田信夫氏の「嘯亭雜錄とその著者」(オリエンタリカ第一號、8)など此の傾向の特に著しい例であらう。學問的に重要であつて而も出来上つたものは、一向に面白くない様に思はれ勝ちな、此の種の基礎研究は戦時中も休みなく續けられ、すでに一つの花を開かせてゐる。藤井宏氏の勞作「明代國之總額に關する一考證」(六卷)(東洋學報五二號、20)がそれである。戦時中發表せられた勞作に續く此の論文は、明代の田土總額が、洪武二十六年の八百五十萬餘頃が弘治十五年四百二十一萬餘頃に激減したと云ふ明史、その他一般中國史書の通説、及び之に對する大正十年以來の清水泰次氏の解釋を多數の原典特に明代地志を徹底的に調べ上げ、比較考察した後、否定し、洪武二十六年の多額の統計は、實は利用の見込みありとみなされた

荒蕪田土を加算したもので結局、當時の耕作田土は三百八十七萬頃に過ぎぬ事、明代中期のそれは、四百萬頃前後を維持、嘉靖、萬曆時代へと漸次的な増加傾向を保ち、萬曆六年には五百一萬餘頃に達した事を明らかにし、更にかつて清水泰次氏によつて明らかにされ、事實上萬曆六年の田土總額の再増が、通説の云ふ様には、乾隆正の丈量の結果ではないと云ふ事實を清水氏は是期の資料で再確認する。私がこゝで藤井氏の此の勞作を、學界に贈られし花と云ふは、たとへば佐野學氏が、明史などの通説をそのまゝに信ず、そして此の田土總額の激減から、主として「墾買、奪取、政府の高壓的沒收等の經濟外強制による」明代皇室や大官などの大土地所有形成過程を引き出して來る、(清朝社會史第二部第一輯)そんな誤謬を、藤井氏の考證が防止する事を云ふのである。もとより藤井氏の研究それのみではいまだ花であつて實ではない。明朝各代の田土總額の動きが明らかにされはしたが、田土が数字的な

總計として、よく、社會構造の上に如何なる歴史的意義を持つたか、より具体的に云へば、その田土が、どの様な所有形態の下にどの様な生産技術を以て如何なる規模で經營され、又どの様に社會的な諸關係を基礎づけたか等の、より本質的な問題が、殘されてゐるから。此の意味で此の研究をそのまゝに過大評價してはならないだらう。たゞこゝで私は、佐野學氏の爲さんとした標を、歴史的意義を見出し、中國史學の上に豊かな實を結ばせる爲には、まづ、此の種の勞多き考證が爲されねばならぬ、そんな段階にある學界にとつて、藤井氏の勞作が大きい價値を持つ事を強調したいのである。

(二)

個別的な諸研究には、特殊なものとして明代の回回曆法の地位と明末西洋曆法確立のいきさつとを論じた。川坂與道氏「西洋曆法の東傳と回回曆法の運命」

(東洋學報五卷十三號、10)があるが、やぼりポピュラーな太平天國に關する研究の多いのが目立ち、而も夫々異つた視

角から論じられてゐる。波多野善大氏

「太平天國の女性」(學海叢卷三號、2)

は客家の女性の面から、特に彼等が中國社會にあつて珍らしく高い地位を占めた

所以を、外山軍治氏の著書「太平天國と

上海」(高桐書院22、4)と、論文「上海

道台吳健忠」(學海一卷七號、1)「太平亂

に於ける清朝の外國に對する援護運動」

(史林三一卷三、四合號、12)は主として

當時の對英米佛外交關係の面から、な

ほ同氏の「上海の神商務場」(東洋史研

究新一卷四號、11)は、以上の諸研究と

關聯しつゝ、激動期の當時の上海に於て、

洋行の擔水夫上りと云はれる揚場なる者

が巧みに買辦行爲をなして巨富をつみ對

内、對外問題に活躍した事情、中國の不

幸なる近代化過程に於ける典型的な觀を

描き出した好篇である。一宮川尙志氏の

「初編太平天國の宗教性」(人文科學二卷

三號、12)は宗教性の面から、太平天國

運動を捉えてゐる。勿論宮川氏は、その

宗教的側面の過重觀を、その種族革命性

の偏重と共に強く戒めてはゐるが、太平

天國軍が、南京を國都と定めるまでのその性格を次の時期の政治性と對比して、

宗教的だと規定し、「太平天國運動の推

進力をなしその一切の制度思想生活習慣

に創造性を與へたのが宗教性であること

疑ひない」と云つてゐるから、結局宗教

的側面から、把握してゐる事は間違ひな

からう。これらの諸研究に對して佐野學

氏の「清朝社會史」第三部「農民暴動」

特にその第三輯「太平天國革命」(弘文

堂刊、4)はより綜合的な問題作であ

る。氏は此の運動の或る意味での近代的

性格や外的特徵としての宗教的性格、反

滿民族革命的性格などを重視し、又此の

大亂に加はつた人々が農民のみならず、

不平インテリ、紳士、富戶、團賊、各種の勞

働者、遊民等廣範な人士を含む事をも認

めつゝ、窮局に於て舊中國社會固有の諸矛

盾、即ち、農民的土地所有と地主的土地

所有との間の、又支配階級としての官僚

層とそれによつて搾取される農民大衆と

の間の、又自足的な村落經濟と商品經濟

との間の及び増加する人口と、餘剩人口

を吸収する近代的産業の存しなかつた事との間の「諸矛盾」と、清代に特有の諸矛盾——即ち滿漢兩民族間の、及び清代の中世的生産方法と、歐米資本主義的生産方法との間の「諸矛盾」に基く農民暴動として把握する。かゝる農民暴動説に對して宮崎市定教授から反駁がなされた。

教授は此の種の叛亂は一、農民の階級的意識二、農民の主体性三、叛亂の結果としての廻らかの農民の地位の向上、の中何れか一つの條件が充たされないと限り農民運動とは云へぬといふ前提に立ち、その意味で比較的、農民的性格をはつきり持つた明朝正統時代の鄧茂七の亂を提示する事によつて「秘密結社をも利用し知識階級をも利用する事をも辭さないもの」を以て農民運動として把握する近頃の「流行」に抗議されたのである。(「中國近世の農民暴動」(東洋史研究卷二號)、12) あくまで史料に即してと云ふ教授の態度は「流行」を追ふ者への厳しい批判であらうが、此の抗議は餘りに農民暴動と云ふ詞を純粹に考へ過ぎたうらみはな

いだらうか。佐野氏は太平軍を見て農民によつて構成されたとも云つてゐないし、インテリヤ秘密結社の方をも決して低くはみてゐない。むしろ此の種の暴動が非農民的方向と清末に導かれる事を一つの法則とさへ考へてゐる。纏へつて、太平亂を含めての清代中期以後の大小の諸叛亂から農民的要索を除けば、それは一体どの様に解明されるのだらうか。太平軍のかゝげた一つの政策的理念、天朝田賦制度は、しひたげられ農民の、その農民意識の明らかな反映ではないだらうか。

問題はむしろ、元末、明末の諸叛亂、否、舊中國各王朝末期にあらはれた諸叛亂と對比して、清代中末期のそれが、如何なる歴史性があるかと云ふ点にあるのではあるまいか。今は只右の如き二、三の疑念を記すにとゞめるが、更に此の種の叛亂が、教授の主張された意味での純粋な農民暴動に移らなかつた原因について鈴木中正氏から一つの問題が提出された。「清代に於ける秘密結社叛亂の性格」

(東洋文化研究第九號、9) これは氏も云つてゐられる様にそれについての十分な解答ではないが、問題提起の意味から併續さる可き研究である。とも角佐野氏の此の種の叛亂に對する解釋を契機として、當時の社會構成とそれが動いて行く動き方に對して研究の深まりがなされ来る事は學界の大きい收獲と云はねばならぬ。開く所に上れば、アメリカに於ても太平天國亂への關心と研究が、深まつてゐるそうである。今後の日本の學界の、太平天國運動に對する研究が期待される。

(三)

政治史的な傾向を持つものに岡田一龜氏の著書「明末黨禍と農民暴動」(樹立書院刊)がある。李爾佳の居所、吾朝府の位置や、かの遼陽籌策の時期等について新説を提出されてゐるし、遼河東西の交通路等についても廿五年間現地に住住せる著者の博識がうかがへる。その本領は建州女直、明、朝鮮三者の、そして建州則に立つての政治的軍事的

交渉であらう。政策乃至政治機構を取り扱つたものに、鈴木中正氏の「清朝儉約令とその政策的意義」(オリエンタリカ第一號23、3)があり特に宮崎教授の「清朝に於ける國語問題の一画」(東方史論叢第一22、7)は滿族出の清朝が漢人統治に當つて直面した國語問題、文書、翻譯の問題を捉へ、而もそれにとゞまらず所謂近世的君主政治に於ける上層機構たる内三院、内閣軍機處の機能とその動きをも論じた。特異な研究として逸し難い。この時代の制度史的研究について戦後唯一のものに同教授の著書「科擧(秋田屋刊21、10)がある。敗戦の年、激化した空襲の真中に「妻子の儀を他所にして」書かれた此の書の特つ意義の一つは千三百年に亘つて實施され、中國史上幾多の重要問題をほらみ從つて精通する可くして而もネグレクトされてゐた、科擧制度そのものに即して綿密周到に而も、他の官吏登用制と併せて通史的に明らかにした点であり、他の一つはこれが單なる制度史的研究にとゞまらず、内藤史學

## 東洋史學界の動向

の正統なる後繼者としての教授の中國史觀が、その方向に推し進められた点であらう。後者について云へば、教授の所謂唐的貴族の没落と共に近世史が始るとみるあの中國の發展の把握に於て、缺く可からずしてなほ十分でなかつた、宋以後の所謂士大夫階級の形成發展の過程が此の科擧制度との關聯を通じて豊富な裏附けを得たのである。此の点戦後學界に強い一線を劃したものと云へよう。只一つ後學として疑点を記し併せて學界の他の一線を示したい。疑点とは唐的貴族衰亡の原因についてである。此の点が十分に明示されないとそれに代る可きかの獨裁君主や士大夫階級の發生發展の歴史の意義が從つて此の發展史的把握に於ける主要部分がなほ檢討する可く残されるのである。周知の様に内藤博士はその原因を唐末藩鎮制に置かれた。「中國近世史」(文弘堂刊22、4)あくまで制度史的把握であるが、宮崎教授は、唐的貴族が土地より遊離し、中央政權に寄食する官僚と化したことに置かれてゐる。(「科擧

擧」三〇―三三頁)そして土地より遊離し國都長安附近に集つた彼らの經濟的基礎は碾磑の如き特種な利權にあり、從つて唐朝を穿つた後梁が國都を汴京に移し、長安の繁華がなくなると、俄然經濟的窮乏に陥つた、と云はるゝのである(同書三五頁)もとより此の著書は唐的貴族没落の原因を主題にせず又教授自身經濟的原因のみで、此の問題を解かうとはされないであらうが、此の書にあらはれた限りの教授の考へ方は問題にされていゝだらう。先づ唐的貴族が支配的な傾向として土地から遊離したか、第二に碾磑の如き利權に經濟的基礎を置いた中央貴族を以て全國的な支配勢力としての彼ら全般に代置していいか? かゝる疑問をかゝげると教授の把握のし方は未だ十分でないと思ふ。此の問題は彼らの存立の内在的矛盾まで從つて貴族を支配層とする當時の社會構成の体系的把握まで探究を擴げなければならぬと思ふが、此の点に關し唐代までを古代的な奴隸制社會として把握する一説が、前田直典氏の

「東アジアに於ける古代の終末」(歴史二卷四號、4)によつて提示されてゐる事は學界に大きな問題を提示したと云へよう。前田氏の説のものも批判に値する点は多々あるが、教授の一線に對比する可き學界の一線として、而もこれが従前と違つてアカデミーの中から提出されてゐる事は、學界の動向として無視出来な

## (四)

此の期の思想を取り上げたものに、先づ安部健太教授の「王朝と華夷思想」(人文科學)一卷三號、12)は、滿洲族出身の清朝が漢人固有の華夷思想―それは此の場合漢人の一、滿族賤視二、滿族王朝否定三、滿族君主否定となつて現實化する―を如何に切り替けたかの問題を取り上げ、夫々順康時代は自ら中國化せる方法を取つたに反し雍正以後には積極的に華夷思想に立ち向つた歴史的な差異が論じられてゐる。此の論證の基礎を主として諸種の編纂事業が置かれた所に、教授の精確史的な漸進志向と、深みが汲み取られる。皇帝を中心とする清朝上

層部の對華夷思想政策をふみにじつて結局彼らが中國化された事實、及び華化した清朝自体、歐米主義資本諸國を夷とさげすみづつた却つてその若々しい力に脅かされざるを得なかつた事實への論及のなかつた事は残念であるが。島田虔次氏「シナに於ける近代思想の挫折」(東光四號、4)は「從來の心學者と違つて、ふかく歴史に通じ當代士大夫の教養に於て完全してをりながら然もそれを具體的根底的に批判して憚らなかつた」爲に萬曆三十年投獄せられ、間もなく獄中で自刎し果した。陽明學左派の思想家李卓吾の人となりと思想を、近代化が不徹底であつた明代中國の歴史的社會的基盤から措かうとしてゐる。此の期の色々な思想をその社會的基盤から解明せんとする傾向は島田氏のみにとゞまらない。島恭彦助教の「東洋的技術思想への反省」(人文科學)一卷一、二合刊號、7)や齊藤秋男氏の「大同書の鍵」(中國文學)四四號、3)がそれである。後者について少し觸れてみよう。従前孫文や三

民主義に與へた影響の点から、主として問題にされた康有爲の大同思想が戦後田所義行氏「中國に於ける世界國家思想」(晶平公司刊、4)と實藤惠秀氏「中國の世界國家論」(新中國十六號)との努力によつて直接大同書そのものに即して、わかり易く紹介されたのであるが、齊藤氏は、此の兩氏の勞作を尙「たゞ平面的になでまわしたうらみ」があると批判し自らの大同書の鍵を、男女の差別撤廢、家族の消滅を説く成部巳部に求める。そして氏によれば「家族の消滅を説く康有爲の主張の要点は、親がその子を私有することを否定して、すべての人の子を世界國家の公有にすることにゐる。…近代的な意味に於ての家族制度の否定からひきだされる、對立した個人の人格がかんがへられ、その上に理想的な世界の構想が築きあげられるのでなく、孝の道德の支配する家族制度から一足とびに「天民」への飛躍が説かれてゐる。「かゝる思想家康有爲は崩壞してゆく運命にある古い中國社會に立ち、かれの血液は士夫

階級の古い教養に脈うつてい」その爲にこそ「新しい社會生活を構成する個人の自覺のために道をひろく近代思想の語り手ではなかつた」と云ふのである。齊藤氏の此の説に對する再批判は讀者に任せるとして、とも角、戦後の此の期の思想史解明にかゝる傾向の強い事は注目されるべきであらう。

(四)

此の期の諸研究中社會經濟問題に關するものが多い事が、著しい動向を示す。私權を亂す最も大きな社會問題たる私鹽、の中、特に道光時代の清私を取り上げその數量、根源地、入手經路、資本主と組織、賣買方法などについて論じた、佐伯富氏の「清代清私について」(山口商學雜誌「十八卷三號22、11」)があり、又清初の兩淮鹽商が、上からの組織總商制の外に自らのギルド組織をもち、その富方に物を云はせて商籍とそれに基く官商なる特殊身分を獲得し、塩業のみならず、文事にも少なからぬ影響を興へ、官界と結び且つ私鹽、高利貸行爲などをなす事

によつてます(貨本を蓄積、後年中國財閥の雄たる可き經濟的基礎を作つた事などを明らかにした、鈴木正氏の「清初兩淮鹽商に關する一考察」(史淵三輯21、3、及六、吾合輯22、3)は此の期の商人の中、特に問題の多い鹽商を色々な面から追究した勞作である。故加藤繁博士の「清代に於ける錢舖總莊の發達について」(東洋學報三一卷三號22、12)は、清代の種々の名稱を持つ貴金屬商、貨幣商の中、錢舖、錢莊が道光時代に、錢票發行や預金の貸出等の機能を行つて、盛んに銀行化したことを先づ明らかにし、次いで此の銀行化が、嘉慶更に遡つて、乾隆嘉慶交替期に、はじめて文献にあらはれる事を博士獨特の精確な筆致で論じた好篇。國家財政や國內社會經濟問題と重大なつながりを持つ賦役について、趙宮谷英夫氏の「近世中國に於ける賦役改革」(歴史評論二卷三號21、11及三號21、12)があり、清國家の重要財源たる地丁銀こそ封建的農業社會解明への一つの手がかりだと云ふ視角に立つて、基本的經濟地

帯、松江府を中心に明朝正統時代の金花銀成立を出發点とする清代地丁銀の成立過程を描いてある。これらの諸研究は夫々のテーマに於てその領域と内容とを深めその點學界の大きい收穫であることは否定出来ない。にも拘らず何か物足りない一事は、生産部面からの考察と把握の乏しい事であらう。一般に中國史學界に於ける社會經濟問題の研究は流通部面とか制度の面に限られるか、少くとも生産部面は第二義的に取り扱はれる傾向が強かつた。云ふまでもなく、過去の中國人特に文字の階級た支那者層が、生産問題に對して深、關心を持たなかつた事に起因して、生産部面についての史料そのものが、乏しく、たま／＼あつても尠大な他の史料の中に埋もれてゐて檢出に容易でないと云ふ事が此の傾向を生産部面の探求、殊に生産部面からの中國史の体系的把握は、今後の學界の重要課題として残されてゐると云つてもよいが、戦後の我が學界はすでに此の方面の少な

らぬ業績を持つてゐる。四川植桑の生産過程を刻明に探究した、烏泰彦助教の「勞作」中國農地社會の技術と勞働」(高桐書院刊21、12)―此の書に對する適切なる批評と紹介が功方直氏によつてなされてゐる。「中國研究」(第2號23、11)―や清代の封建的な滿洲農業社會と密着し、主として、農産物買占商人の機械資本によつて營まれた、滿洲の諸々の工業の、近代化過程を捉えた岸本英太郎氏の「滿洲に於ける近代資本―勞働力形成史序説」(一)(歴史學研究三四號21、10)などがそれであらう。經濟學者たるこれらの人々の研究によつて一つの缺陷部面に大きい示唆が與へられ、東洋史學界が内容を豊富にしつゝある事を喜びたい。藤井宏氏の「朝代糧田考」(「東洋農業經濟史研究」所收日本評論社刊23、5)は明代糧桑の直接生産者糧戶の生産と再生産過程が如何に農業と農村に依存し密着してゐるかを強く暗示する―と云ふのは此の論文の主題は、民戶と糧戶との關係を糧田を通じて明らかにし以て明代の地方制度を解

明する所に置かれてゐるから―研究であるが、明末清初の棉業―を取り上げた西島定生氏の三部作「明代に於ける木綿の普及に就いて」(史學雜誌七七編二號)「支那初期棉業市場の考察」(東洋學報三二卷二號22、10)「支那初期棉業の成立とその構造」(未刊)は特に注目されるべき業績である。(未刊のものはオリエンタリカ第二號に發表の豫定、氏の好意によりゲラ刷りを見せていたといふ)。此の三部作はその對象が新しい部門であるのみならず、棉花棉布の市場關係やその諸商人の在り方を棉花栽培過程、紡績過程、織布過程なる夫々の生産過程と結びつけて究明せんとしてゐる所により大きい意義があるだらう。氏の此の勞作は所謂南京木綿の本場たる松江府中心の織布業が明末清初にかけてはいまだマニユファクチュア的段階は勿論、問屋制支配の域にも達せず、宏範なしかし零細な農家副業的經營に基いてゐる事を主張する。(因みに氏から直接聞いた所によると藤井宏氏は同じ史料から問屋制支配の域に達し

てゐると主張されてゐるそうである。)西島氏に従へば、南京木綿はマニユファクチュアとする通説は少くとも氏の取り扱つた時期に關する限り否定されたわけであるが、世界史的な資本主義化過程に大きい意義をもつた、衣料生産たる棉業のかゝる在り方が若き研究人によつてなされた事は、中國史料のもつ大きい制約にも拘らずやがて此の方向の体系的把握にまで押し進め得る可能性を物語るものではないか。たゆみなき資料解讀への考證學的努力と共に方法的研鑽の必要性はこゝにいよいよ大ききを加へて來るだらう。唯物史觀を放棄し一國社會主義に立つ佐野學氏は三部八冊の「清朝社會史」(弘文堂刊)を學界に問ふてをり、一方唯物史觀に立つ尾崎庄太郎氏は、主として宋以後の中國地主的土地所有問題を論じて學界に問ふてゐる。(中國における地主的土地所有の歴史的特質)中國研究三號23、3)又清代社會の内部的崩壞過程を取り上げた北村敬直氏の「清代の時代の位置」(思想三九二號23、10)は方

法論的に轉回せんとするヤンガー、ゼネレーションが、かの大塚史學の前期的社會解明の仕方を學んで學界に投じた一石に外ならない。

もとより、歴史學は方法論のみを以て始まり、それのみを以て終るものではない。殊に中國史學は、西洋史學、國史學に亦けるよりより以上になほ史料整理が遅れてをり、その意味で個別的考證的研究の必要性は大きい。しかし方法論を持たない個別的考證はいまだ歴史學以前の

ものであることも亦自明である。前田直典氏から投ぜられた京都學派批判や今例示した三氏の夫々の方法論に基く研究の存在は、すでにアカデミーの中國史學も方法論的批判の中に立たざるを得ず、否自ら方法論的に轉回せんとし、すでに立ち上つてもある事を物語つてゐる。考證的な個別研究と共に、否考證的な個別研究の中に自らの方法論を生かし、逆に又その方法論によつて自らの個別研究と体系的把握を押し進める―斯くする事によ

つて、東洋史學は生きた學問、認識と實踐の學問としての本來の姿を獲得するだらう。吾が研究人を含めての世界の人人に大きい犠牲を強要した日本帝國主義の世界史的な敗退、此の歴史的な轉換は、成る程資料そのものを變革しなかつたが現實に生きる吾々人間の、歴史觀、方法論の變革を要求してゐるのである。

(里井彦七郎)